

## ふるさとに夢や誇りをもって、未来の創り手となる島っ子の育成

— 両島の実態やニーズに合わせた、持続可能な島の実現をめざす —

- 1 はじめに
- 2 研究の目標と仮説
- 3 研究のてだて
- 4 研究の実践と考察
- 5 成果と今後の課題

## 研究の概要報告

### 1. レポート内容にみる県内の教育実践の状況

第73次教育研究愛知県集会の「過密・過疎、へき地の教育」分科会では、4本のレポートが発表された。

一つめは、小学校3・4年社会科「店ではたらく人」において、調査活動、かかわり合う場、振り返りの工夫を通して、問いを徹底して追究する子どもを育成しようとする教育実践であった。この実践は、地域における限られた人間関係の中で、友だちから得た気付きをいかして自分の考えを深めるのが苦手な状況を解決しようとしたものである。

二つめは、小6の理科、中3の体育科、中1の総合的な学習、小3の算数科において、さまざまなたてを通して基礎・基本の定着をめざす教育実践であった。これは、島においても進路の希望が多様化する中で、こうした状況に対応するには、子どもたちの基礎・基本の学力向上をめざすことが必要であるとの認識で実践されたものである。

三つめは、話し合い活動、学外との交流などを通して、互いを認め合い、深め合う子どもを育成しようとする小学校における教育実践であった。この教育実践は、長年実践されてきた飼育活動のマンネリ化から脱し、本来の目的である命の教育を深めるために実践されたものである。

四つめは、小6の総合的な学習の時間において、地域とかかわりながら、地域課題の解決にむけて調査し、学習し、実践しようとする教育実践であった。この実践は、地域の郷土料理である五平餅をつくる家庭が減りつつあるという課題も視野に入れつつ、子どもに地域への愛着とともに、地域の継承者としての自覚を芽生えさせようとするものである。

### 2. 討議された内容

討議では、4本のレポートと関連づけながら、小規模校の特性をいかした教育支援のあり方、過疎地域の「ひと」の思いにふれる教育活動のあり方、コロナ禍や学校統廃合の中での地域と学校のあり方について意見が交わされた。討議では、地域学習のマンネリ化を防ぐために必要なこと、教員が地域を知るために必要なこと、コロナ禍や学校統廃合の中で地域との関係をつくり直すために必要なこと、過疎地の子どもたちに身につけさせたい力などについて、有意義な議論が行われた。

(中山弘之 稲垣安明)

## 報告書ができるまで

この報告書は、分会での討議、教組ごとに研究集会を経て作成されたものである。

第73次教育研究愛知県集會に提出されたリポートは4本である。どのリポートも、各教組、各分会の実態をふまえたものであり、地域とのかかわりに力を入れ、素材や人材を有効に活用した実践の報告である。研究主題は以下の通りである。

- ・ 子どもに身につけさせたい力を明確にし、小規模校の利点をいかした教育支援のあり方
- ・ 過密・過疎、へき地における地域の「ひと」の思いにふれる教育活動のあり方
- ・ コロナ禍、学校の統廃合など、諸課題を抱える中での地域と学校のあり方

なお、わたくしたちの研究実践に対して、適切なお指導・ご助言をいただいた各先生方から感謝します。

助 言 者	中山 弘之（愛知教育大学）	稲垣 安明（北設・田口小）
分科会教研推進委員	清水 洸希（豊田・朝日丘中）	大澤 彰介（知教連・常滑東小）
	木村 正寿（豊田・松平中）	及川 泰平（名古屋・戸田小）
	赤澤 太一（知教連・日間賀小）	長尾 彰彦（豊田・巴ヶ丘小）

## 1 はじめに

篠島と日間賀島は、漁業と観光業が盛んで、多くの家庭がそのどちらかに従事している。また、豊かな自然に恵まれ、そのよさを十分に感じながら日々生活を送っている。両島ともに小規模な学校であるが、少人数学級のよさをいかしながら、教育活動をすすめられることが最大の利点である。例えば、きめ細かな個別支援の充実や子ども一人ひとりと良好な関係を保つことができ、学年問わず、全教職員で島の子どもたちとかかわりあい、見守っていくことができる。さらに、地域の声や要望を教育活動に反映しやすく、島全体で教育活動を支え、展開できることなどは、離島ならではの強みである。その一方で、両島、さらには小学校と中学校でも保護者や地域が求める子どもへの教育的ニーズがさまざまであるため、各校に求められているものも異なっているのが現状である。

そこで、南知多町へき地教育研究部会では、篠島・日間賀島の両島の共通研究スローガンを「両島の実態やニーズに合わせた、持続可能な島の実現をめざす」と設定し、研究を行ってきた。へき地ならではの地域の思いや、今後の島の未来や中学校卒業後を見据えた保護者の願いを受け、教育活動を両島ですすめていかねばならないと感じている。

## 2 研究の目標と仮説

### (1) 主題設定の理由

両島は恵まれたことに、地域の方々は誰もが温かく、学校のさまざまな活動・行事などに協力的である。子どもたちは「島の宝」であり、地域ぐるみで大切にされ、これからの島を背負って立つ存在として大いに期待されている。しかし、そのような地域の思いはあるものの、学習にかかわる指導については、学校に一任されているように感じられる。

そこで、まずは学校生活や日頃の授業を通して、子どもたちの実態を把握・理解したり、保護者との懇談の中で子どもたちに対する思いを受けたりして、地域の現状を知り、へき地教育における問題をとらえ、整理することから始めた。その中で、子どもの将来に対する保護者の考え方が多様化していることがわかった。中学校卒業後、島外の高等学校などへ進学するが、卒業後に島へ戻って家業を継ぐことを望む保護者や島外の企業への就職を望む保護者など、さまざまな考えがある。そして、将来の選択肢を広げるために学力向上を望む保護者の声をよく聞く。しかし、保護者の思いとは異なり、子どもたちが家庭学習や毎回の授業に主体的にとりくむことができず、その結果、学力向上につながっていないのが現状である。そこで、「基礎・基本の定着」「基礎・基本の学力向上」に焦点をあてることが、地域の実態やニーズに応えられると考えた。

両島で協力し合い、教育実践を通して島の子どもたちの学びを保障することで、へき地教育の共通のテーマである「ふるさとに夢や誇りをもって、未来の創り手となる島っ子の育成」をめざして本研究の主題を設定した。

## (2) 研究の目標（めざす子どもの姿）

- ・協働的な学習を通して、他者と考えを共有したり、自分の考えを深めたりすることができる児童（篠島小）
- ・「わかった・できた」を実感させる実践を通して、課題解決に向かってねばり強くとりくむことができ、自身の学びの過程や変容を自覚することで、意欲的・主体的に学ぶことができる生徒（篠島中）
- ・個別最適な学びや協働的な学びを通して、自分や他者の考えを尊重し、協働しながら、自ら学び続けることができる児童（日間賀小）

## (3) 研究の仮説

### 仮説Ⅰ（篠島小）

協働的な学びの場面を設定することで、他者の考えと自分の考えを比較できるようになり、自身の学びをより深めることができるであろう。

### 仮説Ⅱ（篠島中）

教員が生徒の実態を把握し、「わかる・できる」授業実践を積み重ねれば、ねばり強く学習にとりくめる生徒を育成できるであろう。

### 仮説Ⅲ（日間賀小）

- ア 児童の実態に合わせた個別最適な学びをすれば、学習課題に「自分事」として向き合うことができ、主体的に学習に向かう力が高まるだろう。
- イ 互いの考えを交流し合う対話や問題解決をする活動を意図的に授業にとりいれていけば、児童は学びの意義や楽しさを実感することができ、協働的な力が高まるだろう。

## 3 研究のてだて

仮説検証のため、以下のてだてを講じる。

### ①仮説Ⅰに対して 協働的な学びの場の工夫（篠島小）

児童どうして問題を解決したり、理解したりするためにグループでとりくむ協働的な学びや話し合い活動を取り入れ、主体的に学ばせる機会を設定する。

### ②仮説Ⅱに対して 「わかった・できた」を実感させるための工夫（篠島中）

単元全体の流れをもとに、必然性のあるめあてを明確に示したり、個々の探究テーマを十分に吟味して考えさせたりすることで学習活動への意欲を高める。また、振り返る視点を明確にもたせた上での振り返り活動を継続的に行ったり、探究した内容をまとめ、第三者に発表する機会を設けたりすることで学びを定着させる。

### ③仮説Ⅲに対して 個別最適な学び・協働的な学びを取り入れる工夫（日間賀小）

児童の実態に合わせ、いくつかの学習環境（具体物やワークシート、難易度別プリント）を作成し、児童自らが選んで学習できるしくみを整える。

## 4 研究の実際と考察

### (1) 実践1 篠島小学校6年生理科 単元：人と他の動物の体

#### ①単元のねらいと具体的なたて

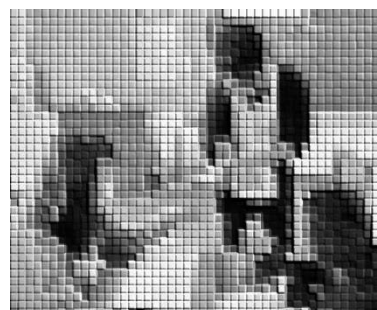
人体の分野は、消化・吸収・血液循環にかかわる体内の各器官のつくりや働きを知るにあたって、資料の活用を通して調べた断片的な知識となってしまうため、理解するのが難しい。これは、実験の結果であっても、あくまで各器官のつくりや働きの一部に過ぎず、結論を教え込む授業展開にならざるを得ないからである。そこで、実験結果を用いて、発展的な内容を伴う課題を取り入れ、主体的に活動する場面を設定し、既習事項や調べた内容を関連づけ説明させることで、より一層の理解を深めることができると考えた。

たて1：実生活にかかわる問いを与えることで、身近な問題としてとらえさせる。

たて2：消化の過程を説明させる活動を通して、消化・吸収、物質の変化に対する考えをもたせることで、その後の教え合い・学び合いを活発にさせる。

#### ②授業の様子（第6、7時／12時間）

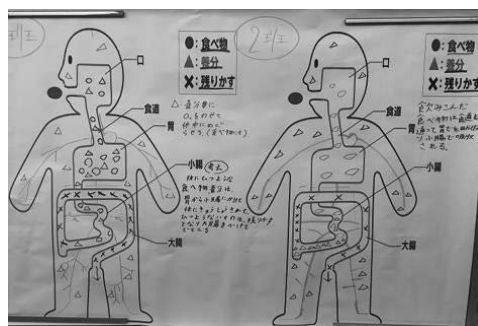
だ液の働きによってデンプンが別の物質に変わるかどうかを確かめる実験では、導入で、ご飯を食べているところを想像させることで、口の中でどのようなことが起きているのか実生活ともリンクさせた。さらに「ご飯を食べると、口の中でどうなるか」と問うことで、甘く感じるという実体験につなげた。また「どうして甘くなるのか、ご飯は甘いのか」という問いを投げかけることで、



【結果を確認している様子】

ご飯（デンプン）ではない別の物質に変化したと方向づけることができた。

消化の過程を説明させる場面では、実体験や実験結果を用いて、どの器官で消化され、吸収されたのかさまざまな考えが出た。その後、グループで意見を集約させると「だ液で分解されたデンプンは、食道を通過して、胃でさらに細かくなり、小腸で吸収される」「胃から小腸にかけて体に吸収されて、必要のないものは残りかすとなり、大腸に送られる」など、考えをまとめ、答えを導き出すことができた。また、前時で考えた「人は何のために食べ物を食べるのか」について、自分の考えが説明できているのかを全体に問い、さらに思考を促すことで、「心臓がドクツとなったときに栄養が体中に広がる」「血液に養分と酸素を乗せて体中にめぐらせる」など、既習事項と関連づけたより深い考えを導くことができた班もあった。



【児童がまとめた結果】

#### ③実践の考察

本実践の消化の過程を説明させる活動では、どの児童たちも実験結果を用いて、自分の考えを発表することができた。消化の過程を言葉やイラスト・記号で表現させることで、消化・吸収、物質の変化がとらえやすくなり、他の意見との共通点や相違点の把握につながった。特に記号で表現することが、どの段階でどのように変化したかがわかりやすかった点や、変化の過程について順を追って説明できる点など、文章表現が苦手な

子どもたちにも有効であったため、活発な学び合い・伝え合う活動となり、グループの考えを共有する協働的な学びにつながったと考えることができる。

また、「食べた後どのように体に取り入れられるのか、デンプンが体の中でどうなるのか」と問うことで、排出までの過程についても考えさせることができた。さらに、発展的な内容を伴うことで、既習事項と関連づけ、さまざまな考えが導き出せるようにした結果、互いに意見を伝え合ったり、考えを共有したりと、学び合う・教え合う姿がみられ、より活発な話し合い活動を展開することができた。また、机間指導を通して、各グループで考えが足りていない・ふれられていない内容について問い返すことで、その問いに対する答えを導き出すことができた。自分の考えを再度考え直したり、他者の多様な考えにふれたりする場を意図的に設定することで、主体的に考えを深める活動につながることができた。

## (2) 実践2 篠島中学校3年生体育科 単元：球技（バスケットボール）

### ①単元のねらいと具体的なでだて

バスケットボールは、切り替わりの激しい攻防の中で、パスやドリブルなどの個人的技能をいかしながら集団的技能を発揮し、ボールを運び、ゴールへシュートして得点を競い合う競技である。本来、バスケットボールの正式な試合は5対5で行われるが、ボールにふれる機会を増やすために3対3で試合を行うことを軸とした。また、生徒のアンケートから「どこに動けばよいかわからない」という回答があったため、それを授業でとりあげ、以下のでだてを講じた。

でだて1：スリーサークルボールシュートという練習をとり入れ、ゴール前に攻撃側のボールを持たないプレイヤーの走り込む位置を可視化する。

でだて2：ゴールの近くに走り込む前にいるべき位置も可視化することにより、ゴールへの動きの方向性を理解させる。

### ②授業の様子（第7時／9時間）

授業開始のあいさつ・健康観察、ウォーミングアップまで一連の流れをつくることで運動量の確保につなげることができた。その後、ホワイトボードの前に集合させて本時の「めあて」、授業の流れ、振り返りの視点（活動からわかったこと）の確認を行い、再び活動にうつった。

スリーサークルボールシュートのオフェンスのみの練習では、ゴール前（下）の走り込む位置を意識して走り込み、シュートまでもっていくという意識づけをすることができた。また、シュートのパターンもゴール下のシュートやレイアップシュートなどさまざまなシュートシーンを見ることができた。

続いて、3対2の練習では、約束事としてディフェンスの1人が必ずボールマン（ボールを持っている人）をマークするという条件をつけた。そうすることで、オフェンスが有利な状態でボールを回すことができ、最後はゴール下でシュートを打つシーンをつくり出すことができた。



【3対2の様子】

最後にオールコートで3対3の試合（ドリブルなし）を行った。試合を行う前にチームの作戦を立て、それをふまえた個人の目標を立てさせてから試合を行った。ドリブルなしという制限をかけることで、生徒がボールにふれる機会が増え、また動かないとパスをもらうことができないため運動量の確保につながった。振り返りの場面では、試合での作戦や個人の目標を通してわかったことを記入させた。そして、数人の生徒に発表をさせて授業を終えた。



【作戦タイムの様子】

### ③実践の考察

バスケットボールの単元を終えた後のアンケートでは、92.3%の生徒がバスケットボールのことを好きになれたと回答した。その理由として、「作戦を考えて、チームで話し合いながらプレーすると、自分ができることも増えたので楽しかった」や「試合の中でシュートを決めたりパスを出したり仲間の攻撃に貢献できて楽しかったからもっと好きになれた」「今までバスケットボールでどう動けばよいか全然わからなかったけど、多少わかるようになったから」などがあげられた。また、ボールを持っていないときの動きについても84.6%の生徒が動き方を理解できたと回答をした。

本実践を通して、生徒の実態やニーズに合わせた授業を展開することで生徒に「わかった・できた」という達成感を感じさせることができた。

## (3) 実践3 篠島中学校1年生 単元：「総合的な学習の時間」「再発見！篠島のよさ」

### ①実践のねらいと具体的なたて

自分たちの暮らす故郷篠島に対して、少人数学級であることのよさをいかし、生徒一人ひとりがテーマを設定し、追究していく活動を軸とする。その中で、学んだことをまとめたり、発表したりする場を意図的に設定する。単元を通して、故郷に対しての知識や理解を深めるとともに、林間学校で訪れる岐阜県の郡上（山間部）の環境・まちの様子・暮らし・文化などについても学びを深められるようにする。そして、篠島と比較を通して、今まで気付かなかった篠島のよさにも関心をむけ、故郷篠島への誇りをより高められるようにしたいと考えた。

本実践をきっかけに、へき地教育研究部会の共通のテーマである「ふるさとに夢や誇りをもって、未来の創り手となる島っ子」を育成することをねらいとする。

### ②実践の様子

生徒たちは、篠島について断片的な知識はもっているものの、正確に把握していることは少ない。そこで、オリエンテーションで学び方や単元の計画などを示し、学習の見通しをもたせることとした。以下は実際の指導の流れである。

#### ア 篠島についてのテーマ設定

個人で篠島についてのウェビングマップをつくり、その内容を全体で共有することで、「篠島には何があるのか」を全体で確認した。その後、各個人で「テーマ」「調べ方」「発表の仕方」を考えた。「テーマ設定の理由」「インターネットだけではなく、もっと深く知るための方法はないか」「どうやって発表すると、聞く側によく伝わる



か」など、生徒と相談することで発表までの道筋を明確化した。

#### イ 篠島についての事前調べ

篠島は観光地であるため、インターネットで収集できる情報が多い。また、郷土史なども学校で保管しており、それらを用いて個人での調査活動のきっかけをつくった。

#### ウ 各自での調査活動

学年通信を通して、保護者に協力を呼びかけた。聞き取り調査を行う人が見つからなかった生徒には、地域の専門家を紹介した。

#### エ 篠島についてのまとめ

調査活動で調べてきた資料をもとにまとめを行った。タブレット端末を用いたプレゼンテーションや模造紙などの紙面で、発表用の資料を作成した。

#### オ 郡上についてのテーマ設定

郡上についてタブレットで調べながら、ウェビングマップを作成した。また、篠島と郡上を比較して考えるため、同じ分野の内容をテーマにすることとした。

#### カ 郡上についての事前調べ

現地でより深い学びを得るために、インターネットを使って事前に調査活動を行った。調べた内容については、「学び」を意識させたいと考え、タブレット端末を活用してリーフレットを作成した。

#### キ 篠島についてのまとめの発表にむけた練習

「表情」「視線」「しゃべり方や声の大きさ」「スピード」「内容」の5観点に気をつけて発表の練習にとりくむ。

#### ク 林間学校説明会での個人発表

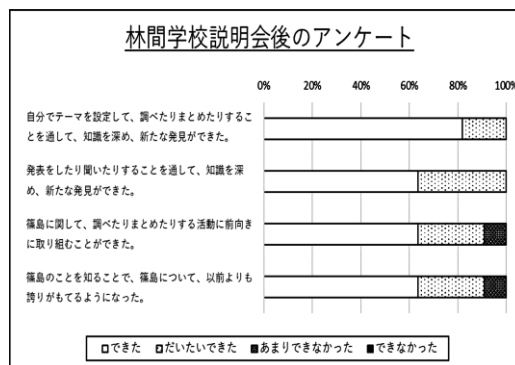
1人当たり5分程度の持ち時間で、篠島についてのまとめの発表と郡上についてのテーマ、林間学校にむけての意気込みを発表した。

#### ケ 今後の計画

林間学校では、郡上八幡城や郡上八幡博覧館を訪問し、郡上の文化や歴史、景観などについて学習する。その後、篠島と郡上を比較し、篠島のよさを再発見する学習につなげていく。

### ③実践の考察

林間学校説明会で個人発表をした後、これまでの学びについてアンケートを行った。アンケート結果は、右のとおりである。生徒全員が「自分が調べたりまとめたりすること」や「発表をしたり聞いたりすること」を通して、理解を深め、新たな発見ができたと答えた。また、9割以上の生徒が、篠島について「以前よりも誇りがもてるようになった」と回答した。



【学びについてのアンケート結果】

また、ここまでの学びの感想として、「篠島をより好きになるぐらいしっかり調べられた」や「インタビューをして元々知っていたことも、もっと深く知ることができた」な

ど、今回の学習が故郷篠島について理解を深め、誇りを高めることにつながったと言える。しかし、本実践はまだ単元の途中であり、林間学校を経て、最終的なまとめを行っていく。

#### (4) 実践4 日間賀小学校3年生算数科 単元：わり算

##### ①単元のねらいと具体的なてだて

本時は、わり算の前半部分で、初めて包含除の考えにふれる場面である。かけ算に苦戦する児童もいる中で、すべての児童が本時の中心となる問題の答えにたどり着けるように、以下のようなてだてを講じ、「個別最適な学び」を実現しようと考えた。どの学習環境を使うかは児童が自己調整し、学力差のある児童が、それぞれの方法で本時の目標に到達できるよう工夫した。

てだて1：学習課題と同じシチュエーションをつくり、実際に具体物を操作して、 $12 \div 3 = 4$ という答えにたどり着けるようにする。

てだて2：具体物から離れ、学習課題を図で示したものをもとに、答えにたどり着けるようにする。

てだて3：具体物や図示するものがなく、「3こずつ×人数=12こ」という言葉の式だけをもとに、答えにたどり着けるようにする。

##### ②授業の様子（第3時／10時間）

導入時にプレゼンテーションソフトウェアを用いて、本時の内容を視覚的にとらえることができるよう工夫した。教科書の内容に少し変更を加え、本校の教員があめを分けあうという設定にした。そうすることで、児童たちの興味や関心を高め、学習に向かうことができると考えた。児童たちは、「あめを1人に3こずつ分けていくと、何人の教員に配ることができるのだろうか？」という、学習課題に対する問題意識をもつことができた。

てだて1～3と題した学習環境の中から、児童は自分が試してみたいものを選んで学習にとりくんだ。特に、実物のあめがあるてだて1を選択する児童が多く、あめを紙コップに3こずつ入れていくことで、「 $12 \div 3 = 4$ 」になるということを確認することができた。さらには、グループで確かめあい、どんな式になるかを考える時間を設定したことで、個別に学んだことや確かめたことをもち寄り、考えを深めることもできた。児童たちは「分けるのだから、今日もわり算だと思う」「12このあめを1人に3こずつ分けたから、式は $12 \div 3$ になると思う」「式はわからないけれど、実際にあめを分けたら、4人の教員に分けられたよ」などの意見を交換した。その結果として、「あめを1人に3こずつ分けていくと、4人の教員に分けることができる。式は $12 \div 3 = 4$ 」と答えることができた。個別最適な学びを実現するために、てだて1～3の学習環境を設定し、それを児童が選択し学習へと向かうことができるようにした。そうすることで、それぞれ違う実態をもつ児童たちが、異なる方法を取りながらも、本時の目標を到達することができた。

##### ③実践の考察

課題として、以下の二点があげられる。

1つめは、「多くの児童がてだて1の学習環境を選択したこと」である。てだて1は具

体物があり、操作することで直感的に確かめることができた。だが、本来てだて1は学習低位の児童をイメージし設定した学習環境であり、中位から上位の児童に対して用意したてだて2や3はあまり選択されなかった。児童の実態に合わせたてだてを講じる必要がある中で、てだて1～3の学習環境の設定がどうであったかということは検討が必要である。

2つめとして、本時の目標である包含除について、児童たちが理解できていたかという点である。具体物を操作する際、あめを1こずつ紙コップに入れる姿があった。本来であれば、あめ3こをまとめて操作する必要があったと考える。実物があったことで、児童たちの興味・関心を高めることができた反面、ねらいにあった活動にすることができなかった部分があった。あらかじめ、あめを3こまとめておくなど、包含除という考え方を理解できるような工夫が必要であった。

## 5 成果と今後の課題

### (1) 成果

- ・仮説Ⅰ（協働的な学習を通して、学びを深めさせる実践）について

教え合う活動や話し合い活動を通して、多様な考えを共有することができた。さらに、発展的な内容をとりいれたことで、活発に学び合う・教え合う姿がみられ、主体的な学びにつながった。その結果、視野の広がり、考えの深まりを感じることができた。しかし、協働的な学びの質を高めるためには、何について議論させるのかをしっかりと吟味する必要がある。

- ・仮説Ⅱ（「わかった・できた」を実感させる実践）について

めあてを明確化にしたり、探究テーマを十分に吟味して設定させたりしたことで目標達成にむけ、活発に意見交換をして、各自で探究活動をすすめるなど主体的に活動をする姿につながった。また、学びを定着させるための時間を設けたことで、学びを定着させるとともに自分の学びを正しく認識させることにもつながった。

- ・仮説Ⅲ（個別最適な学びと、協働的な学びをとりいれた実践）について

個別最適な学びを実現しようと考えたとき、学級の大まかな実態ではなく、児童個々の学習の力を理解して、てだてを考える必要性が明らかとなった。児童がどこまで理解し、どこでつまづいているかを理解した上で、個別最適な学びや協働的な学びが実現できるようにしたい。また、単元構想に重きを置き、どこで知識・技能を習得させ、どこで個別最適な学びのてだてを講じるのかという点についても、これからの課題としてとりくんでいきたい。

### (2) 今後の課題

今回の研究を通して、地域との連携や児童生徒とのかかわりをもっと密にする必要があると感じた。そうすることで、島の実態やニーズをより知ることができる。また、教育的課題の発見から島の未来や創り手の育成につなげることができる。これこそが、へき地教育に携わる教員としてのだいたいご味であるように感じる。さらに、保小連携や小中連携のさらなる発展も必要であるが、各島だけの課題解決だけでなく、今後は両島での連携をさらに強める必要がある。

また、現在、中学校再編で地域を知る機会が減ることが懸念される。9年間見据えたべき地のよさをいかした総合的な（教科横断的）学習のカリキュラム再編や統合された南知多中学校での地域学習がどの程度のものなのかわかりかねる部分が多い。ふるさとに誇りを持ち、島の将来に積極的にかかわっていけるかどうかは、小学校での地域とのかかわりがたいへん重要なものになってくる。これは、島だけの問題でない。今後は、南知多町内の小中学校との連携もすすめていきたい。